

今週のメニュー

■トピックス

◇今夏の2つのアート展から

■随想

◇古代ヤマトの遠景【番外】(挨拶)

木下 清隆

■編集後記

■トピックス

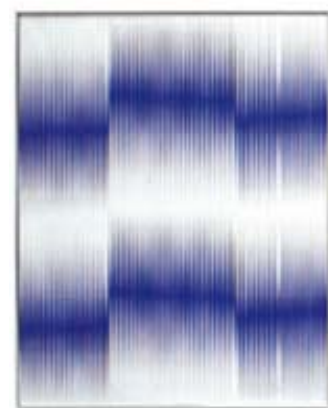
◇今夏の2つのアート展から

今年で4回目となった PVC Design Award (塩ビものづくりコンテスト) ですが、この開催も一つの契機になったのか読者やデザイン関係の方々から、塩ビ素材がアートに使われているというお知らせをいただく機会が多くなりました。この夏に情報をお寄せいただいた2つの塩ビ素材を用いたアートをご紹介します。

1. 不思議な動きキネティック・アート展 ～動く・光る・目の錯覚～

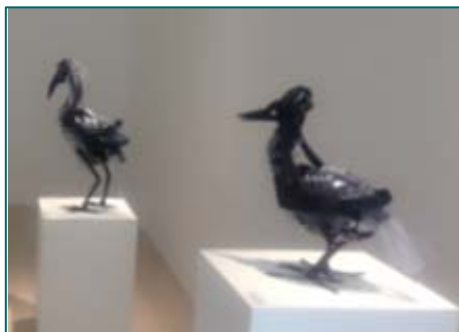
『損保ジャパン東郷青児美術館』で7月8日～8月24日の期間に開催された同展は、1960年代にイタリアを中心に展開したキネティック・アート(動く芸術)を日本で初めて紹介したものです。キネティック・アートとは、20世紀のヨーロッパに誕生した作品そのものに「動き」を取り入れているのが特徴で、機械じかけで動いたり発光する作品、実際には動かなくても、目の錯覚を利用したり、見る人の視点の移動に応じて動いて見える作品もあります。会場では、先駆的なイタリアの作家たちなど約30名による平面・立体の90の作品が展示されており、絵画などの動きのないアートとはちょっと違った楽しみ方ができました。

会場の中ほどの「移動すると動いてみえるアート」という展示コーナーに、塩ビを用いた作品が展示され、いずれも5～10mmの塩ビのテープにねじりを入れた構造になっていて、視点を移動させると、下地の色が動いてみえるというものです(写真①; トーニ・コスタ作<交錯>)。三角のキャンバス、2重のテープや下地の色を2色にするなどした8つの作品があり、自分が動くのに合わせてさまざまな動きをみせてくれます。これら作品は、古いものは1959年から新しいものでも1967年の作とありますので、製作されてからほぼ半世紀経っています。ねじれたテープがどれも緩んだりしているところは見られず、おそらく製作された当時と変わらないアートを50年経った今でも鑑賞できているものと思います。



写真①

2. 個展 LOST ANIMALS



写真②

7月25日～8月23日の間、東京月島の『ギャラリーアートコンポジション』にて1985年生まれの彫刻家である辻蔵人さんの個展が開催されました。鉄のスクラップと透明塩ビを組合せて、日本では既に絶滅した動物たちを再生するというテーマで展示されました。

全体に白を基調とした会場の中で、キタタキ、トキ（写真②）、エゾオオカミ、ニホンカワウソ、カンムリツクシガモ（写真③と作者）の絶滅してしまった5つの動物たちが、ほんものと同じ大きさで甦っていました。黒く塗装された無機質の鉄スクラップに、厚さ1.5mmの透明の塩ビが配されることによって、今にも鳴き声が聞こえそうな生命感が感じられました。作者によると、質感があり、透明でかつ柔らかい素材は、塩ビしか見出せなかったとのことでした。また、色つき透明の塩ビシートを探しておられたので入手先を紹介しましたが、どんなアートになって表れるのか、今後の活躍と合わせて期待したいと思います。

2つのアート展をみさせていただき塩ビは、製品が普及しだした50年も前からすでにアートの世界にも取り入れられ今も作品として生き続けている、そして、今なお現代の若いアーティストにも魅力を感じさせる力がある素材だと感じました。



写真③

■ 随想

◇古代ヤマトの遠景【番外】（挨拶）

木下 清隆

<筆者からのご挨拶>

前回をもって、『古代ヤマトの遠景』は一応、完了とさせて頂きました。長い間、お付き合い頂き有り難うございました。

今回の完了で肩の荷が下りる思いでしたが、想定外の本稿継続の要望があり、いろいろと考えた末、お受けすることにしました。そこで、どのような経緯から『古代ヤマトの遠景』を連載するようになったのか、今後はどのような番外編を意図しているのか等を、簡単に説明させて頂く必要があるかと思い、ここにご挨拶文を書くことにした次第です。

『古代ヤマトの遠景』には、これに数倍する内容を持った元原稿が実は存在します。そのタイトルは『櫛田神社考』というもので、櫛田神社の祭神搜しの経緯をまとめた一種のルーツ譚です。なんでこんなものを書いたのかと云いますと、私の郷里、博多の櫛田神社の祭神について、郷土史家から疑義が出されているからです。「こんなマイナーな神が祀られているのは、何かの間違いだ」といった内容です。それでは本当の祭神は誰なのか、を突き止めてみようという気になり、約八年の歳月を掛けて書き上げたものが『櫛田神社考』なのです。

それが九分通り完成した頃、VECの中でメルマガの発行が始まり、環境問題に関する連載の依頼がありました。当時、広報を担当していた私は、誤解と無理解と偏見に満ちた塩ビの環境を、すこしでも良くするために、正しい理解を求めた連載文を書くべきだとの思

いがありました。ところが、そのころ、塩ビを攻撃する市民団体の定期刊行物を読み、タイトルをただ目で、中の文に目を通す気にはなれませんでした。彼らの主張していることは読まなくても分かるからです。そのとき、塩ビ業界が出すメルマガも第三者に読んで貰うためには、紋切り型の内容ではダメだと思ふようになりました。要するに塩ビを正しく理解して欲しいと願ふことより、塩ビに、より親しんで貰ふことの方が大切だと、思ふようになったわけです。そこで思いついたのが、『櫛田神社考』のダイジェスト版だったわけです。当時のVECでこんな事を考えていたのは私ぐらいだったので、一人ぐらい塩ビと無関係な話を連載しても良いだろうと、スタートさせて貰った次第です。

櫛田神社考は、極めて専門的な内容の著作で、古代学にかなりの造詣のあるアマチュアの方を対象に書き始めました。ところが、内容が段々古代学の定説に反する、或いは新規な考え方に違いないと自負するようになると、専門家にも読んで貰いたいと願ふようになり、そのことを意識して書くようになりました。ですから、櫛田神社考では、随所に専門家の名前が出てきますし、その著作からの引用も多数あります。

こんな内容ですからダイジェスト版では、このままというわけにはいかず、その内容を分かり易く要約しなければなりませんし、当然専門家の名前などは出せなくなるわけです。このようにしてスタートした「古代ヤマトの遠景」には、櫛田神社の名称など何処にも出てきません。それが出て来るのは(78)回になってからです。では、何故、櫛田の名前を出さないまま古代ヤマトの話が始まったのか、ですが、その理由には以下のようなものです。

博多の櫛田神社の本社は伊勢の櫛田神社ですが、ここの祭神を調べて行くと、どう考えてもその昔は、「櫛玉命」を祀っていたはずであるとの結論に至りました。ところが櫛玉命とは、一体どんな神なのか、古事記・日本書紀には似た名称の命は登場しますが、櫛玉命そのものは登場しません。従って、その氏素性は全くと言っていいほど分からないのです。しかし、古代史の中に何かその痕跡があるはずだ、と思うようになり、卑弥呼以降の古代ヤマトの歴史全体の見直しの必要性を痛感し、それを始めたわけです。

この過程で、私はこれまでの定説で納得のいかないものは、私なりの説を立てました。例えば、日本各地の前方後円墳は、ヤマト王権の及ぶ範囲を示しており、勝手に築造されることは有り得ない、と云うのが現在の有力な説です。これに対し、私は各地の王が倭王との心理的な距離感でその規模を定め、自由に構築したものであると考えるようにしました。そのように解釈しないと、どうしても全国各地の墳墓の存在とその大きさの説明が出来ないからです。

更に私の最大の問題提起は、初代倭王を復活させ、しかもその出自を出雲とした事です。更にこの王に「天照国照彦火明櫛玉饒速日尊」なる諡号を贈ったのは敏達天皇である、とする説です。これは私の個人的な新説ですが、このことは「古代ヤマトの遠景」でかなり詳しく論じたので、ある程度ご理解頂いているものと期待しています。この初代倭王の御霊こそが現在の伊勢神宮の祭神です。当然男神ですが、持統天皇が女神に変えた経緯は先に述べたとおりです。話の発端となった「櫛玉命」のルーツもこの初代倭王である、と結論することで解決し、私の『櫛田神社考』も無事完結する事が出来ました。

日本の古代学は私から見れば「芯抜き」の古代学と言えらるもので、初代倭王のイメージが全く欠落したまま、周辺の事跡をかき集めて構築された代物なのです。櫛玉饒速日尊から権力を継承する形で神武天皇が大和入りしたと、明確に古事記、日本書紀に記載されていながら、此の人物が全く論究されていないのです。この人物は物部氏の祖であるとの記紀の記載を鵜呑みにして、あたかも臭いものに蓋でもするかのよう放置しているのです。

この櫛玉饒速日命が我が国古代学に於いて、アンタッチャブルな存在であるとされている限り、日本の古代史が真実に近付くことは殆ど不可能であると見ています。

以上のように私の『櫛田神社考』の大半は古代史の再検討で占められているため、此の部分だけを連載すれば、新しい古代史の紹介が出来ると考えてスタートしたのが「古代ヤマトの遠景」だったわけです。当初はイントロ的な部分が続いたため、ダイジェスト版も比較的容易に作成できましたが、後半になると内容が複雑になってきたため、遂に意を決して、『櫛田神社考』の内容の一部をそのまま、「古代ヤマトの遠景」に用いることにしました。当然、若干の修正、一回分としての余白を埋めるための加筆もありますが、大きく逸脱した点はありません。

「古代ヤマトの遠景」がスタートして間もない頃、『櫛田神社考』は、やっと完成しました。当然、出版社への原稿送付を始めました。特に古代学に強い出版社を幾つか選択しました。所が見事に皆討ち死にです。無名の人物の古代学を覆すような著作など、相手にもされないことを思い知らされました。更に長大すぎるのも大きな欠点だと思っています。ざっと計算しても、400頁程度の本で上中下の三巻構成になろうかというものです。出版社が尻込みするのも当然です。すっかり意気消沈しましたが、このまま此の原稿を没にするのは勿体ないと思い、日本の主要神社に原稿をCDにダウンロードして送付することにしました。『櫛田神社考』の中で、伊勢神宮を筆頭に大和の大神神社、高鴨神社、出雲の熊野大社、出雲大社、和歌山の日前・國懸神社、熊野本宮大社、熊野速玉大社、山城の上賀茂神社、八坂神社と言った現在の超一流神社の歴史とその祭神について、かなり突っ込んだ検討をしており、その内容を神社側に知って貰いたかったからです。返事は数社からありましたが、その中で伊勢神宮からのものが一番丁寧で、私の論究を評価してくれたものでした。私の「伊勢神宮の祭神は男神である」との主張を踏まえた上で、「大変参考になります」との返信には、大いに感激しました。

以上のような経緯で、私の連載は終了しましたが、今後、更に継続するに当たっては、新たな書き下ろしはせず、原本となっている『櫛田神社考』の書き出しから、ある程度の量を紹介することに致しました。次回からは、論文調の「古代ヤマトの遠景(番外)」がスタートすることになります。多くの方々はその堅さにうんざりされるかも知れませんが、幾人かは、大いに興味を持って頂けるかも知れませんが、そのような方が少しでも増えることを期待して、暫く連載することに致します。乞うご期待。

以上

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いです。>> [\(筆者\)](#)
「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)

■ 編集後記

京、大阪、名古屋、福岡での作品の展示会に対応しています。東京、大阪は既に終わり、明日7日は名古屋の三協化成産業(株)の名古屋本店、さらに11/27の[アクロス福岡](#)での開催となります。受賞作品の他にも塩ビの特徴を活かした多くの作品が展示されますので是非見に来ていただければと思います。(ももった)

作品展示会の詳細は[こちらから](#) ⇒

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 高橋 満

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp